

主催:東広島市教育委員会

## 前垣邸庭園の特徴

特別の高価な石は用いず、材質に頼らない石組の面白さが現れている。重森の初期の特徴であり、清新さが感じられる。手前にある角張った石は前垣家の山から掘り出したものである。重森はこの角張った石組で自己表現をした。特に立石と横石の組み合わせは彼の出世作である東福寺方丈のそれを髣髴させる。また手前の石組と背後にある旧庭にあった平凡な石を活かした手法は見るべきものがある。重森はこの石を探すのに当家の山に何回も入ったが、石が決まれば庭はできたも同然だ。特筆すべきは、坪庭にある三石からなる抽象庭園である。まさに現代の龍安寺庭園とも云える。

## プロフィル

①重森三玲(庭園芸術の宿命): 重森は日本画家を目指して学生時代を学んだが、紆余曲折の後、約 200 庭を作り、庭園に関する著述を残した。以下に不朽の大著を示し、さらに重森が個人邸での造園システムの解明に努めたい。

- 1『日本庭園史図鑑』全26巻が昭和14年3月に全巻完成した(昭和11~13年に約300庭実測調査し、243庭掲載)。
- 2『日本庭園史大系』全35巻昭和46年上梓。

庭園芸術の評価が難しい理由の一つは、素材が天然自然にある石、草木、砂、水であり、しかも、それを用いて造形さ



れたものも何らかの意味で自然の風景である点にある。自然の素材を使いながらも自然を超えた形を創造すること、言い換えるなら、あるがままの自然ではなくて、人が感じた自然、単なる自然を抜け出し、超えたものを創造することこそが正に芸術といえる。

今回の催しは個人庭園について考察することにした。重森は多作の作家であるが、特に民家の庭も多く作ったのが特徴である。従来庭園といえば貴族、将軍、大名、財閥等が主体であったが、重森は一般の市民からの要望に応えた稀有な作家である。それを可能にさせた

のは、当意即妙の既知、芸術的才能は勿論であるが、比較的小さな土地にでも、宇宙的広がりを持つ造園システムの開発にあったのではないだろうか。今回はこのシステムの解明に焦点を当てる。

②斎藤忠一: 齋藤忠一: 重森三玲は、昭和8年に奈良の春日大社から式年造替記念の庭の依頼を受けた。37歳の時で、翌年に作庭している。作庭家との最初の注文であったが、彼はまだ作家でもなければ、庭園の研究家で



もなかった。ただ、前年に設立された日本庭園の研究を目的として設立された「京都林泉協会」に参加して、京都庭園の研究を始めたばかりである。その彼に何故このような作庭の依頼があったのであろうか。この時、彼は「神の庭」を主題として、大変哲学的な考察に努力をしている。「神は齢を取らない。永遠に若い。芸術も同じで、永遠なモダンでなければなれない。」として、極めて斬新な庭園を創作した。この後、

彼は全国庭園実測調査研究を行い作庭を続けることになったが、この時はまだ「華道」の研究に熱中していたのである。

#### ③中田勝康

日本庭園は世界的基準で評価すると「はたして芸術と言えるか」の問題を提起し、「芸術である」ためには象徴庭園ではな



く抽象庭園であることを提案している。さらに日本庭園を個々に解釈ではなく、大局的に5つの系譜に区分して、系譜ごとに発生から生成発展過程の論理を提案。この系譜は外来の思想(道教・仏教・抽象主義)と天才作家(蘭渓・夢窓・雪舟・小堀・上田・小川・重森三玲など)が織りなす庭園史と解釈した。また重森三玲の庭を「登録記念物(名勝地)」化に傾注し、現時点では10庭が登録記念物に指定され、2庭を申請し審査中。今回の講演会は重森三玲による個人庭園が如何に独創的であるかを項目ごとに提示する。

# 前垣家「延壽庭」(S30):洲浜模様は個人邸における重森庭園の基準など新規な試み多数

- ①個人庭園における基準となった洲浜模様:庭に面した書院・書斎を取り巻く洲浜造形は庭を広く見せる
- ②個性あふれる石を使って有機的な石組は後世の手本になる
- ③坪庭に作られて抽象庭園は日本庭園を超えた世界基準に適う芸術作品である



①前垣家「延壽庭」(東広島市 S30)国登録記念物

軒下に洲浜をデザインして視線を手前に集中し奥行きを出す手法は個人庭園の基本形となる。



②前垣家:配石の教科書とも云える①欠損部のある石の選択 ②捨石の有効活用 ③重森が前垣家の山から選択した石と既存の石との関連性を持たせ一体感を構成する手法 ④動きのある石組



③前垣家:この小さな空間にある石組 みは不思議な魅力を発揮する。まさに 現代の龍安寺だ。

## 重森三玲の作った個人邸庭園を中心に22庭を示す(但し④縮景園・⑧小川家庭園・⑨桂家庭園は古庭園)。

重森の作った庭は約 200 庭あるが、そのうち約半数が個人庭園である。個人庭園は社会の変貌で消滅することが多いが、今のうちに重森の個人庭園の庭の特徴を記録に留めておきたい。



④縮景園(広島市)国名勝:広島の古庭園といえば縮景園がまず思い浮かぶ。作者の上田宗簡は名古屋城・徳島城・和歌山城にも雄渾な石組み構成美の庭をつくった。



⑤半べえ(広島市 S46): 重森が池泉庭園を作る?と思われるかもしれないが、豪華絢爛な池泉庭園も造るのです。 ただし漏水対策、水の供給など維持管理に腐心する。



⑦桑田家(福山市 S34):優雅な露地に破天荒な造形



8岡本家(福山市 S41):竹垣の門から建物への通路が庭園に



⑥小川家(島根県江津市):山畔 に築かれた三尊式枯滝の重厚感



**⑬旧友琳会館**(吉備中央町 S44) 地上に穿かれた彫刻とも云える



◎清原家(兵庫県芦屋市 S40)地上に描かれた絵画とも云える



**⑨小河家**(島根県益田市 S35):豪邸を彩る巨石の乱舞、 一方露地や書院には繊細な襖絵や彫金がが所狭しと散り ばめれれている。



⑩桂家(山口県防府市):造形は龍安寺より近代的。しかし細心の注意を払った庭園は、自己主張を押さえた静謐な庭。まさに禅思想によって作られたとしか言えない謙虚さがある。



**⑩村上家**(島根県六日市町 S34):各部屋にはそれに対応した美しい造形が覇を競っている。それにもまして驚くべきことは、どの部屋の襖も変色、破損が全くないのである。家人が如何にこの造形を大切にしてきたのかよく理解できる。マチス・カンデンスキー・モンドリアンなどのヨーロッパ抽象主義の影響が濃厚だ。



**⑫久保家**(伊丹市 S45):個人庭園としては珍しい正方形に近い庭。点在する集団石組みが苑内を巡る洲浜模様の園路で区切られている。





(15) 西谷家(岡山県吉備中央町 S4): 奥行きの無さを借景で補う



16天籟庵(岡山県吉備中央町 S44):植栽の無い公民館の露地



⑩増井家(高松市 S31)国登録記念物:露地を美的対象に



⑩織田家(愛媛県西条市 S32):既存の巨石を伊予の青石で均衡する



⑩岡本家(愛媛県西条市 S32):自然のままの伊予の青石が躍る



**⑩越智家**(愛媛県西条市 S32) 越智家詳細は HP の表紙にあり イサムが逗留したことで有名な茶室









越智家の「牡丹庵」は桂離宮や修学院離宮の写しと云える造形が満載だ。「牡丹庵」は両離宮の特徴的な内容を吸収した。白牡丹模様の地の使い方が秀逸



②旧岸本家(大阪府高槻市 S47):間口に対し奥行きが浅い典型的な民家の庭であるが、横長の造形がそれを払拭



**②志方家**(神戸市 S47):超現代的にデフォルメされた二重洲 浜が圧巻。一方、苔地の出島には15石が配置し均衡する



**②西山家**(豊中市 S15)国登録記念物:重森は既存の池泉庭園を枯山水庭園にした。そこには重森の自宅に作った大仙院状の龍門瀑の滝が蘇った。当庭の特徴は狭い間口に対して奥行きが深い。この特徴を生かし鯉魚が青龍に化身した姿にした。



**②井上家**(大阪市 S15)大阪市名勝:小さな空間に禅の精神がみなぎった蹲踞庭園といえる。

井上家の露地は「巨石壺庭」と言うが、重森らしく茶室の露地と言うよりは、造園家重森の面目躍如の庭が林立する。この造形の特徴は伝統に従った決まり事をすべて排除して、蹲踞の原点を西芳寺の「龍淵水」に求めている。重森は芸術的感性は尊重するが、一方宗教的な原点回帰を忠実に守ろうとする意気込みが感じられる。露地の庭は小さなものであるが、「巨石壺庭」の名の由来のようにテーマを一点に絞っていることが、この庭の存在感を高めている。



**②小林家**(堺市 S46):古墳に面した静かな庭である。前垣庭のように出島が入れ違えているが、この場合は青石を葺いている。建物と古墳の堀との距離が狭いので、このような視覚的錯覚で奥行きを出している。左側の造形は飛行機の尾翼を思わせ、右側は亀頭石を連想する。となると奥の石組みは蓬莱山になり「鶴亀蓬莱の庭となる」。



**⑩村上家**(兵庫県西脇市 S24): 苔地の州浜に囲まれた枯池には三神仙島を設けそこに石組みをしている。 東福寺本坊石組みと光明院の苔地の州浜が融合した庭園である。 この種の基本構造の庭は個人庭園の基礎とる記念碑的庭園だ。



②村上家(島根県六日市)入り組んだ巨石の亀島と護岸石とは対照的に、鶴島は大胆な抽象造形で現代彫刻のようだ。